

Title	松浦宮物語の方法
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1994, 15, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67344
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

松浦宮物語の方法

伊井 春樹

一 唐後の戦略

宇文会の軍勢「三万人ばかり」を挟み撃ちにするという唐後の戦略により、弁少将は武器も持たない遣唐使の日本人と、兵士とをあわせてわずか「五六十人ばかり」を引き連れ、命に背くこともできないまま、悲しい思いをしながらもと来た山道を引き返すのであった。文皇帝の死、その後には勃発した皇帝弟燕王の反乱、弁少将など日本人一行は唐后や太子と行動をとともにせざるを得ず、長安を捨てて遠い蜀山をめざし、剣閣の険しい山岳地帯で追討軍の魔手から逃れようという算段であった。しかし、もくろみ通りにはいかなないので、従った者たちも途中で脱落したり姿を隠すなどしてしまい、今では都から行動をともした人数の半分にも満たないありさまである。すぐ近くまで迫った燕王軍にどのように立ち向かうのか、人々は考える気力もすっかりなくなり、とりわけ宇文会は「人の形にして虎の心」(一)があり、「向かふところの力山を抜き、射つる矢石を

通る、たとひ戦いくさのたけひとしくとも、人の力向かふべきにあらず」とされる勇猛な大將軍だけに、官軍方は方途もなく窮してまどうばかりであった。それを救ったのが唐後の果敢な決断で、「広き野中にて挑み戦ふべきにあらず。すみやかに過ぎつる山に帰り入りて、かれがいくさの行き過ぎむうしろを襲ひて、前うしろに声をあはせて、心よく戦ひて同じちり灰ともならむばかりぞ」(四六)と、野中の戦闘であれば勝敗の帰趨は明らかであるため、山中で敵軍の背後にまわり、前後で鬨の声をあげ、戦うだけ戦い、それで負ければ玉碎するばかりだ、というのである。

唐后には、前後から襲うという奇襲戦法のほかに、もう一つ別の成算があった。宇文会は「はかりごとおろかに、つはものを用ひる事かろがるし」と唐后が断ずるように、知謀に欠け、兵士の扱いを疎略にするというのである。戦いにおいて戦略はその成否をほぼ決めかねないし、集団戦になると一人の武将の力など無に等しいことなどは、定家に近い時代の源平の争いで

も明らかであろう。謀がなく、統率力もない宇文会ならば、前後からの思いがけない反撃に味方の軍勢が混乱すると、自分の力を頼みにして全面に出て一人で戦うはずである。その宇文会さえ討伐できれば、大軍とはいえ後は自壊してしまふであろうし、それは「かならずその心ざしを失ひつべし」とするよう、彼の野望を断つこともできると、ここで唐后は大胆な予測を立てたのである。宇文会が抱いていたという「心ざし」とは何なのか、太子や唐后の旧勢力を滅ぼし、新たに燕王を皇帝に即位させるという働きをめざしていただけではないことは、後に唐后の口から明らかにされる。

唐后は輿の傍らに弁少将を呼び寄せ、故皇帝による恩顧のあったことを説き、「過ぎたまひにしのこりの恩を忘れずは、今夜せめきたるをあひ防ぐはかりごとをめぐらして、はげみ戦ふべし」との泣きながらの懇願に、彼はこの事態に及んで今さら逃れる手立てとてなく、弓矢のことも知らないながら、「国の恩を報ず」るためにわずかの兵を率いて山道を引き戻らざるを得なかった。敵軍の背後から攻撃をするためとはいえ、武将でもない十七歳にすぎない弁少将が、名を聞くだけでも震えあがるほどおそろしい宇文会と対決するため、命を賭して赴くという、物語ではいよいよ緊迫した場面が展開することになる。このあたりには、あるいは十七歳の「容顔誠に美麗」なる敦盛が、熊谷直実の手にかかって最期をとげた悲壮な話が重ねられているのかも知れない。

追い詰められた状況にあったとはいえ、これほど重要な任務でありながら皇帝の恩義を持ち出してまで遠来の若い客人に託したというのは、無謀の誇りを免れないにしても、唐后には密かな確信があったことによる。それは、口にはできないものの、弁少将は宇文会との対決に勝利を納めるという確かな予測を持っていたのである。皇帝は、死を前にして「あらぬ国の人として、あひみる日数すくなけれど、汝はかならずひとたびは国をたひらぐべき相あり」と予言し、「かならずこのよしを忘れず、我がことばをそむくべからず」と厳命したが、すでにこの後の弁少将の進むべき道をすべて知っていたといえる。自分の死後に訪れる燕王の反乱、それを平定してふたたび治安を取り戻すのが弁少将の課せられた運命であり、そうすることが「命あやぶみなくして、かならずもとの國に帰るべし」とする、生きて日本に帰れる道だということである。唐后も同じ認識を持っていたからこそ、弁少将が拒否できないように、あえて皇帝の恩義を持ち出してまで、背後からの攻撃に赴かせたのである。敵軍を攪乱することによって、かならず宇文会は一人前面に躍り出るはずで、そうなる弁少将と対峙せざるを得なくなる。

唐后は弁少将に「和国はつは物の国として、ちひさけれども神のまもりつよく、人の心かしこかんなり。ことなるはかり事をいだし、ちからを尽くせ」と、戦いにあたっての一つの示唆を与える。彼は失われた記憶が呼び覚まされるように、皇帝か

らは世を泰平にする相があると言及され、后からは神の加護のあることがほめかされる。皇帝にしても、唐后にしても自ら直接手を下すことができないものの、その代りの働きを日本の弁少将が果たす運命にあることをすべて知っているのである。宇文会がいずれは滅ぶにしても、弁少将自身が反乱の鎮圧のために直接行動しないかぎりはあり得ないことであるし、起こるべき運命を皇帝や后が教えるわけにはいかない、とするのが作者が描いた人物造型だったのであろう。あらかじめ予定された運命ではあるにしても、それはあくまでも自らがきりひらくところに訪れるとする、源氏物語での運命感と軌を一つしているともいえる。

弁少将は自己の運命を自覚しないまま、暗澹たる思いで、千人もの官軍がいたにもかかわらず、わずか五、六十人の手勢を引き連れ、「わが本国の仏神を」念じながら先に立って深い山道に戻っていくが、この仏神への祈りは唐后の示唆によるところで、まさにそれに感応するように後に住吉の神の効験が現われることになる。いわば、弁少将は皇帝や后の予知した運命の糸に操られて行動しているといってもよく、ここには梅の里の女性（唐后）との逢瀬のように、彼の強い意志は見られない。運命といえ、華陽公主との出会いもそうで、この宇文会との戦いとこの二つにおいては、弁少将にとっては後に述べるように不可避のことがらであった。

敵の後方に陣を布いた弁少将は、夜の明けるとともに烽の煙

に呼応して山から駈け下ると、相手方は奇襲にあわてふためき、海に向って逃げまどい、倒れ伏すなどの混乱状態に陥る。この後は唐后が予測した通りの展開で、宇文会は前方に出現した官軍の大將軍を目にするやすぐさま走りよって首を打ち落とし、「うしろの方にすぐれて弓射る者あり」と聞くと走り戻って戦い、軍勢が混乱すればするほど、力を自負するだけに奮闘のためかけずりまわるありさまであった。ここでの「すぐれて弓射る者」とは弁少将を指しており、彼は宇文会と見ると「引きまうけたる矢にて、鎧の開き間を射るに」と、かなりの活躍をしていたことを知る。弁少将は「本国にして弓矢の向かへる方を知らざりき」と述べるように、弓矢の扱い方（と）さえも知らなかったということには齟齬があるし、鎧の間を狙うというのはかなり練達した武將を連想させる。弁少将でありながら、すでに住吉の神の加護によって一人の兵士に変身した姿になっていたためで、これはすぐ後に出現する神兵そのものといえよう。しかし、神の力によっても、弁少将の射る矢は宇文会の鎧を通すことができなかった。

宇文会はずこしもひるむことなく、太刀を引き抜き、兵士七、八人とともに馬の轡を並べて弁少将一人に向ってくる。弓矢では効果がないと知った弁少将は、自分も太刀を抜いて対するものの、宇文会もはや相手の命は手中に収めたとばかり襲いかかろうとするところに、奇跡が起ったのである。

一人と見つける左右に、形、姿、馬、鞍まで、ただ同じさま

なる人四人、たちまちにいできぬるに、たけき心もしばしとどこほりて、見さだめてうたむとするに、ただ同じさまなる人また五人、宇文会が後ろにはせかけて、(五)

宇文会にとつて弁少将などひとたまりもないものと、太刀をふりあげて切りかかろうとすると、一人と見ていたはずの弁少将の左右に寸分たがわぬ四人の姿が、同じ鞍を置いた馬に乗って出現し、さらに背後にも五人かけつけてきたのである。九人の弁少将が、宇文会と七人の手下を、「太刀抜きたる右の方より、竹などをうち割るやうに、馬、鞍まで一刀に割り裂きつる」と、たちどころに滅ぼす始末で、そのすさまじさに敵の軍勢はもはや敵対する氣力を失ってしまう。

このようにして唐後の計略と弁少将の働きにより、官軍は宇文会の追討軍を打ち破り、援軍も得てふたたび長安の都に戻り、燕王を逆に反撃することになるのだが、その前に少将は木のもとに臥していて夢を見、「波のほかきしもせざらむ郷ながら我が国人にたちは離れず」との日本の神の託宣歌を聞き、現実には甲冑、物の具、馬の鞍にいたるまで授けられるのである。ここではじめて弁少将は神から授けられた甲冑などを身にするのであるが、それでは宇文会を滅ぼした折はどのようないで立ちだつたのであろうか。そこでも同じ馬と鞍の九人が加勢しているため、それはいずれも神の使いとしての兵士だったはずで、順序としては宇文会との戦いの前に夢は位置すべきではなかったか。長安の都門を守る燕王軍の胡兵は、長い鈍と毒矢で防ぎ戦

おうとするおぞましさに、官軍が恐れをなしてひるむとみると、弁少将は一人軍勢から離れて神から授けられた矢を話つと、固めの厚い板は木の葉のように貫き通り、「色も姿も変らぬ人々」がここでも出現して敵軍を撃退し、九人が門を乗り越えてうち滅ぼしてしまつたのである。二度にわたる神兵の働きによって、皇帝死後の国内の混乱は平穏をとりもどしたわけで、これもひとえに予想を越えた弁少将の勇猛果敢な活躍によると言えるであらう。

二 唐後の告白

正三位大納言橘冬明と明日香皇女との間に生まれ、「かたち人にすぐれ、心たましひ世にたぐひなく」成長した弁少将が、弓矢のことも知らないと述べながらも、宇文会の背後に回つては「すぐれて弓射る者あり」と恐れられ、都門の胡兵に対してはわざわざ一人離れて弓を射るといふ、まさに神業としか考えられないような戦いぶりを示す。しかも、同じ姿の九人が行動をともしたにもかかわらず、彼は一向にそれを不思議とも思わず、当然のように受け入れ、敵軍を倒すことに奮戦し、後はふたたび華陽公主に続いての梅里の女との恋に心を砕き、すっかり武將の面影は一掃されてしまう。託宣歌に「我が国人にたちは離れず」と、神の加護が明らかにされるだけに、彼は拝受

した矢を敵軍に向つて堂々と射ることができた。それは、彼の身に神がまさに乗り移つて靈力が与えられていたためであらうが、それは宇文会との戦いにおいてもすでに同じ現象だったはずである。それとともに、彼は動乱を平定するという任務が与えられていたのであり、その間は前後で描写される弁少将ではなくなつていたといつても過言ではない。

唐後の語るところによると、宇文会は「身の力あめの下に並びなく、心、虎、狼のごとし。もはらに天下をのむ心をさしはさめるによりて、御門、官位をさづけたまはず、近づけつかひたまはざりき」と、くらべようもないほどの獷猛な心を持ち、天下を奪い取らうと虎視眈眈と狙っていただけに、それと知つた皇帝も官位を授けず、近臣として仕えさせもしなかつたのだという。燕王の反乱をそそのかし、やがては本性を現わすはずだったとすると、それこそが唐后が弁少将に述べた宇文会の野望だったのである。唐后は、「その身の冥の助けありて、目の前にあらはれたる鬼神の力たちそひて、ただ人のならひにことなるは、国津神の従ひ守り、待ち迎へたまふ心の深きによるゆゑなり」と、弁少将が常人とは異なる活躍をしたのも、仏神の冥加によつて鬼神の力が加わつたためで、国津神の守りというのは彼の帰国を待つ心が深いためだと説き明かす。このように、唐后は宇文会討伐にいたる背景を少しづつ語るものの、弁少将はまだ自分の置かれた立場を理解することはできなかった。

唐后が、宇文会との戦いの真の意味を弁少将に打ち明けたのは、帰国も迫つた六月十日の夜のことであつた。梅の里の女と唐后との一致、驚愕する弁少将、しかしほどなく二人は別離の運命にあるだけに深い悲しみの淵に沈むのだが、ただなぜこのような契る仲となつたのか、その運命の秘密を彼女としても打ち明けずには仏罰を蒙りかねなく、ここから長い告白が始まる。

宇文会といひし、まことは阿修羅の身の生まれきて、すでに我が国を滅ぼすべき時いたれりしを、先王皇帝おぼし嘆きしあまり、玄奘三蔵を使ひとして、天帝にたびたびうれへ申したまひき。我は、第二の天の天衆にて、さらに下界に下るべきゆゑなかりしかど、天帝このことをあはれびたまふによりて、天上に時の間のいとまをたまはりて、この国に生をうけて、乱をさめ、国をおこすべき御使ひに下りきたり。この国にいささかのゆゑあるによりて、このことに選びあてられしかど、女の力にて、はかりがたきにより、その人を定められし時、そこには天童の身として、天帝の御前にさぶらひしを、「汝、我が弓矢をたまはりて、阿修羅の化身をうちくだくべき」よし、仰せられしに、この国にいささかも縁ある人なく、また弓矢を預るべき所なくて、和国の住吉の神に仰せつけられしなり。(三七)

思いがけない弁少将の運命であり、唐后との結びつきの深さを思はずにはいられなかつたはずだが、ともかくここから次のような事実を知ることができる。

① 宇文会は阿修羅の化身であり、唐国を滅ぼすことをたくらんでいた。

② それを知った故文皇帝は嘆き悲しみ、阿修羅の野望を阻止すべく、玄奘三蔵を使いとしてたびたび天帝に訴えていた。

③ 唐后は、実は第二天（忉利天）の天人であり、本来は地上に下るべきではなかったのだが、天帝が皇帝の願いをあわれに思い、少しの間だけということ、この国に生をうけ、乱を鎮め、国を盛んにするために下されたのだという。

④ 唐后は女人であるため、天帝は近仕していた天童に弓矢を授け、阿修羅の化身を滅ぼすようにと下されたのが弁少将だという。しかし、天童は唐に縁故がなく、弓矢を預ける所もなかっただけに、日本の住吉明神に命じて託したのだとする。

これが弁少将と宇文会とが戦わざるを得なかった背景で、唐后はもと天人であるとの記憶を持っていただけに、反乱の勃発に「深く恐れ憂ふ」必要もなく、都から逃避したとはいえ、天帝の命通りにやがて天童が阿修羅を滅ぼすはずだという自覚をしていた。ただ、与えられた運命と異なったのは、天人でありながら、愚かな人間に生まれ変わっただけに、かつて同じ忉利天の天童というよしみもあって、現実の弁少将に心を寄せるようになったことである。天人としての行為ではなく、唐后という人間の本性がまさっての振る舞いだっただけという。このような話を聞くにつけ、弁少将は「かすかに思ひあはするかたはしも

いでくるにや」と、遠い記憶が呼び戻されたようだとするものの、これによって彼のその後の生き方に大きな影響があったわけではない。それはともかく、ここで弁少将は自分の与えられた任務と運命を知ることになったのである。

唐后は、「我おろかにいやしき女の身、いとけなきよはひにして、かたじけなくかしこき君に仕うまつることをゆるされ、身にあまる位にそなはりて、十かへりの春秋をおくりしかど」

（五）とするので、入内して十年を経ているようである。また、後のことばによると、「五官中郎將鄧無忌といひける人のひとつむすめ、十三にて宮の内に選ばれまゐりたまひける。かたちのすぐれたまへるによりて、ほどなく位をすすめて、十七にて后にたちたまへるといふなれば、姉おとなどだにおはせず」

（六）と、彼女の父は鄧無忌、十三歳の年に入内し、十七歳で立后、宮中入りして十年を経ているというので、今年二十三歳である。天衆から人間として地上に生まれ下ったのは二十三年前、かねて宇文会である阿修羅の謀反を知った文皇帝が、天帝にその憂いをしばしば訴えていたのは、年立からすればそれ以前だったことになる。

文皇帝は、前年に弁少将が入京して対面した折に「御門は三十余ばかり」と紹介されているため、阿修羅の危機を感じていたのは十歳以前の頃、天帝が救いの手を差し伸べて天衆の一人を人間世界に送り込み、その成長を待って十三歳で入内させるといふ運びになったようで、皇帝は二十歳余だったことにな

る。それから十年を経て、今は皇帝が三十歳余、唐后が二十三歳となるのだが、皇帝は幼い時に即位し、聡明だったためか世の不穏な状態を早くから察知していたと考えられる。弁少将は今年十八歳、唐后とは五歳の差、この二人の密通は、藤壺中宮と光源氏との關係を念頭に置いているようで、まさしく若紫巻での密通事件は藤壺二十三歳、光源氏十八歳であった。

天衆は切利天から女の身として地上に下されることになり、これでは阿修羅の化身を退治できないと知った天帝は、すぐさま第二の候補者を探したようで、それがそば近くに仕える天童だったというのである。天衆は「時の間のいとまをたまはりて」と人間に生まれたのだが、異界と人間世界とでは時間の単位を異にするのは「竹取物語」によっても明らかで、彼女は与えられた任務を終えればすぐさま帰らなければならなかった。後に「四十年にすぐまじきを」と述べているので、天上での「時の間」は人間世界では四十歳までの寿命だったようである。唐后としての天衆と弁少将とが同年でなかったのは、地上に送り出されるほんの少しのずれもあつたであらうし、彼にはまた別の任務も帯びていたことによる。天衆は、弁少将となった天童と力をあわせ阿修羅を滅ぼして「乱をおさめ」、「国をおこすべき」使いとしての役割が賦与されていたのだが、悲しいことにも人間の性としての、人を愛する心が生じてしまったというのがこれまでのいきさつである。

三 宇文会阿修羅との戦い

弁少将の「鎧のあき間」を狙つての矢にもひるむことなく、宇文会は太刀を引き抜いて「伴ふつはもの七八人もろともに」取り囲もうと馬を向けて襲いかかってくる。天帝が住吉明神に預けていたという「甲冑をはじめ、物の具、馬、鞍」などを、弁少将が夢の啓示によって授けられたのはこの後であり、その武器を用いての矢によって都門を守る胡軍を滅亡させることができた。すると、宇文会との対決の場面では、天帝から拝領した弓矢はまだ手もとなかったようで、その代り別の方法によって彼に勝利を与えようとしたようで、それが影武者ともいうべき神兵の出現であつた。

この分身について、『明月記』の正治元年（一一九九）九月十二日条に記した式子内親王女房信濃の体験として伝える奇妙な話に依拠しており、物語の成立も従来よりも後の正治元年以降になることが、草野美智子氏によって提唱された(3)。ここでは成立に関しての論議は措くとして、そこで指摘された記事は確かに注目に値しよう。定家師の竜寿御前からの又聞きなのだが、前年の七月ころ、女房信濃が式子内親王の住まう大炊殿の東の車寄せにある細殿で実見したことのようで、「同形寸分不違物六人並坐」していたという。女房は恐れをなして答えなかつたものの、「其容体物様」を問い詰めると、「非法師、非

尼、非女、非児之由称之」ということで、「所推量人ヨリハ小物歟」と判断する。定家の姉は、「不好虚言、仍所信受也」と、嘘をつくような女房ではないだけに、話には信憑性があると打ち明けた次第である。人間よりも少し小さく、法師でもなく、尼でもなく、女でもなく、子供でもなく、しかも同じ形で寸分違わない者が六人並んで座っていたとする正体は不明ながら、定家は「今聞此事、奇而猶可奇」と強い感心を示すことになる。ただ同じ姿の六人というのが、すぐさま弁少將の分身と結びつくものかどうか、しかもそれが危機に陥ったところに出現して助けるという構想にまで展開するものか、かなり距離があるように私としては思量する。

『大鏡』（巻六）によると、東三条院四十賀において、頼通と頼宗の舞を評して「まことにこそ、ふたところながら、このよの人とはみえさせ給はで、天童などのをりきたるところそみえさせ給しか」とするように、天童はしばしばこの世に降り立つものとして認識され、しかも仏法守護のもて人の危難を救うこともあった。『今昔物語集』にはこういった天童の出現が記されており、比叡山の僧光日の夢には「天童八人出来テ、此ノ傍二経ヲ読誦スル僧ヲ礼拜シテ、香ヲ焼キ花ヲ散シテ舞イ遊」(巻十三、第十六)んだとし、僧長円も「八人ノ童子有リ」(同、第二十一)と夢に見、いずれも浄土への導きとみなしている。『拾遺往生伝』(4)によると、大僧都定照が急ぎのことがあったて上洛しようと淀河で舟にのったところ、激しい波と風

に翻弄され、「衆人驚怖」するありさまだったが、「時に天童十許人、河の中より出でて、船を捧げて渡る。然して後に天童還りて河の中に入りて失せぬ」という奇跡があり、これを後に僧都は「法花経の十羅刹、反り現じて我を渡すなり」と語ったという。切利天から遣わされた天童の弁少將、その危機を救うために同じ天童が同じ姿となって下されたとするほうが、『明月記』の記事からの直接の影響とするより合理的ではないだろうか。

天童が出現するとなると、一人の例もありはするが、八人とか十人などと集団で描かれ場合も多く、このあたり弁少將が宇文会と対決するに際しての九人の神兵による加勢と関連はするのであろう。ただ、なぜ九人と特定する必要があったのか、私にはここに作者の抱いていた阿修羅の本性と深くかかわっていたのだろうと思う。『宇津保物語』俊蔭巻には「かしらの髪を見れば、剣を立てたるがごとし。面を見れば、ほむらをたけるがごとし。足手を見れば、鋤・鎌のごとし。まなこを見れば、金碗のごとくきらめき」(5)と、魁偉で醜悪な容貌をしていたようだが、仏典によるとさらにそのすさまじさは想像を絶する姿として描かれる。『観仏三昧海経』(巻一)には自然に生じた卵から八千年を経て一人の女性が生まれ、形は青黒く淤泥のようで、頭は九百九十九あり、頭には千の眼、九百九十九の口、一つの口には四つの牙、牙は上につき出て火のようであり、二十四の手、その手には一切の武器を持ち、身長は須弥山ほど、

大海に入りて楽しみ、嵐風を起こして海水に吹きつけるという。その女性に水精が入って懐妊し、八千年の後に男が生まれたのである。それが阿修羅であり、「其児身体高大四倍勝於母。兒有九頭頭有千眼。口中出火。有九百九十九手八脚海中出声。号毘摩質多羅阿修羅王」と、母をはるかにしのぐ身体、それには九つの頭と、頭には千の眼、これが「宇津保物語」と重なるのであろうが、口からは火を吐き、九百九十九の手と八つの足、海中に住み、中から声を出すとする。

阿修羅は九つの頭を持っていたこと、それがために弁少将の神兵が九人出現したのではないか。九つの頭を持ち、一の頭について百十一の手というのだから、まるで八俣の大蛇やまづに手足のある姿がイメージ化されてくるが、そのような姿の阿修羅の化身である宇文会に対するには、どうしても九人が必要とされたのであろう。この阿修羅については、『経律異相』巻四十六「鬼神部」にも同文が見え、日本でも広く読まれた『法苑珠林』巻五「修羅部」でも「此女有時。在海浮戯水精入身生一肉卵。復經八千歲生毘摩質多。有九頭。頭有千眼。口常水出。手有千少一。脚唯有八」と、ここでは口から常に水を吐くとしながらも、九頭であったことを記す。もっとも阿修羅像は一つではなく、さまざまな説があるようで、しかも四種とか十種とも伝えられ、その悪魔的存在の阿修羅・アスラはインド以外の地や他の宗教にも影響を及ぼしているという。

天帝と阿修羅の戦いも諸経に見られるところで、我が国でも

『今昔物語集』の「帝釈、与修羅合戦語第三十」（巻一）に、天帝の妻舍脂夫人は羅睺阿修羅（四阿修羅の一）の娘だったが、阿修羅は奪い返そうとして「常ニ合戦ス」とする。ある時、帝釈が負けて逃げようとして蟻の列を見、踏み殺さないようにと立ち止まったところ、追いかけていた阿修羅は援軍を得て反撃に向うものと思い、逆に逃げ帰って蓮の穴に籠ったという。

『法苑珠林』には右の引用に続いてこの説話が記され、『経律異相』にも阿修羅が蓮の茎の「孔中」に入ったと記す。もっとも、『法苑珠林』巻六十四では車に乗って逃げる天帝が、林のもとに金翅鳥の巢を見つけ、「尔時帝釈恐車馬過踐殺鳥子。告御者言。可廻車還勿殺鳥子」と、蟻ではなく鳥の子を避けたことになっている。

『松浦宮物語』で、天帝が阿修羅を滅ぼすため天衆と天童が地上に遣わしたというのは、多くの仏典に見られる両者の戦い（『法苑珠林』巻五「戦闘部第七」他）を背景にしたの構想であろう。ヒンズー教においても、インドラ神（帝釈天）をはじめとして天神たちと阿修羅との絶え間のない戦いはよく知られた説話で、ドウフシャンタ王が神々の求めによって阿修羅の征討に赴く「シャクンタラー」の詩劇も残される。これなど弁少将の任務に近いものがあるが、仏典以外にどれほど阿修羅説話が日本に伝えられていたのかは明らかでないので、指摘だけにとどめておく。

文皇帝は阿修羅の危難を恐れ、玄奘三蔵を使いとして天帝に

たびたび安全を求めて訴えていたようで、天帝としても放置しておくわけにはいかず、願いを聞き入れて遣わしたのが天衆と天童であった。ただ奇妙に思われるのは、虚構の作品でありながら、ここにいたって突如固有名詞の人物を登場させる必要があったのか、天帝と阿修羅とを繋ぐ何らかの関係があるのか、といったことである。これに対する有効な資料は見いだしていないが、『法苑珠林』巻五に「玄奘法師云。貞観十三年。奘在中印度摩迦陀国那爛陀寺云々」と、玄奘がインドに滞在中一人の俗人から「聞彼山内有阿修羅窟。别有宫殿」と、阿修羅の窟の所在を耳にしたという。阿修羅の住む場所は須弥山の北の海にあったようだが、これにも諸説があり、海の穴に住んだとか、地上の山中、また「西国志云。中印度在瞻波国。西南山石洞中。有修羅窟。有人因遊山修道遇逢此窟。人遂入中見有修羅宫殿処」(『法苑珠林』巻五)と、インドの山中にあったともいう。人がたまたま山で発見し、中に入ってみたところそれが阿修羅の宮殿だったというのだが、これを玄奘三蔵が聞いたというのである。この窟というのは、『今昔物語集』に見えた、阿修羅の逃げ帰った穴とも関連するであろう。今のところここまでだが、何とか玄奘と阿修羅を繋ぐ糸があったとは言えそうで、このような説話が鎌倉期に伝えられ、作者は皇帝の仲介役として登場させたのではないかと思っている。もちろん私は、仏典から直接の影響とは考えていなく、そういった文献を引用したり、典拠とした説話なり雑説が存したのであろうし、玄奘三蔵が登

場するからには当然『西遊記』が念頭にあったはずで、そこから孫悟空の分身も連想されるのは自然のなりゆきではないかと思う。

四 弁少将の運命

「俊蔭十六歳になる年、もろこし船いだしたてらる。こたみはことに才かしき人を選びて大使・副使と召すに、俊蔭召されぬ。父、母悲しむこと、さらにたとふべきかたなし」と『宇津保物語』の俊蔭巻は語り始められるが、十六歳の弁少将も「明けむ年、もろこし船いだしたてらるべき遣唐副使になしたまふべき宣旨あり。大将も皇女もいみじきことにおぼせど、すべてすぐれたるを選ばるるわざなれば、とどめむちからなし」(二六)と、まったくといってよいほど同じ状況を設定する。露骨すぎるといっても過言ではない引用だけに、誰しも弁少将の姿に俊蔭を重ねて読むはずで、しかも俊蔭の阿修羅との出会い、天人からの琴の秘曲相伝といった重要な事件にしても、阿修羅化身の宇文会の出現、華陽公主の琴の伝授といった物語の展開に、読む者は疑いようのない一致を見だし、弁少将の帰国後の運命もほぼ同じような軌跡をたどることを予想したのであろう。俊蔭にしても弁少将にしても不本意ながら日本を離れることになったとはいえ、ただ弁少将は帝の意志による派遣という体

裁をとってはいるものの、唐に渡らざるを得ない宿命を負ってこの世に生を享けていたのである。それは天衆の唐后が告白したように、阿修羅を滅ぼす役割として天上世界から下されたのであり、本来ならば直接宇文会の住む唐に生まれてもよかつたはずなのだが、「この国にいささかの縁ある人なく、また弓矢を預るべき所」もなかつたため、日本の住吉明神に託したのだという。阿修羅を滅ぼすだけならば天衆の存在など必要なく、遣唐使によって大陸に渡り、反乱に巻き込まれながらも彼は帝や皇子を守り、宇文会の討伐によって天帝の命を遂行する、といった内容にしてもよかつたはずである。しかし、それではあまりにも味気ない物語になってしまうため、阿修羅退治のために切利天から遣わされた天衆である唐后との秘められた恋、それは藤壺と光源氏との許されない恋、『浜松中納言物語』における唐后と中納言との同じく秘められた関係、作品に底流する巫山の女への恋慕などをモチーフにし、優艶な雰囲気をもしだすことにした。いわば彼女は、阿修羅を滅ぼすために弁少将を日本から呼び寄せる役割として地上に存在しているにすぎなく、許されない恋の逢瀬を重ねたのは、人間に生まれたがための過ちだったのである。

唐后は、弁少将との別れに際して「許されし、時の間のいとまなれば、この世ををさめむこと、いくばくの月日にあらず、四十年にすぐまじきを、かへらむ道も疑ふ所なければ、さらに惜しむべき世の別れならねど」(二〇九)と、天帝から許されて

地上での生活をするのは「時の間」だとし、人間世界では四十年を満たないのだという。唐后は現在二十三歳、あと十七年の命ということになるが、その間に彼女は幼帝を守っての「国をおこす」という任務がまだ残されているはずである。彼女のことはさらに続き、

そこには、蓬萊の仙宮の中に、世々に結べる契り深くて、この世の命もまた久しかるべき故あれば、今は天衆に帰りがたくや。「琴の声にかかづらひて、下界にとまるべき故あり」とこそ、かたへの人もいふなりしか。

と、天童である弁少将は人間としての命が長く、すぐには切利天に帰ることができないとし、さらに彼は琴にかかすらわつて地上に留まらなければならない運命があるのだと説き明かす。彼女としては、天童である弁少将とともに天上世界に帰りたい思いなのであるが、天帝から与えられた運命だけに、それはかなわぬこととあきらめざるを得なかつた。

唐后が仄聞した、阿修羅を滅ぼすだけではなく、天童に付与されたもう一つの運命とは「琴の声にかかづら」うことであり、そのためにしばらく「下界にとまるべき故」があるのだという。この作品のモチーフは、すでに指摘したように『宇津保物語』俊蔭巻での俊蔭による阿修羅との出会いと秘琴の伝授という二つの事件に依拠しており、しかも前者には唐后が、後者には華陽公主を振り分けるという構造になっているのである。楼のもとで遭遇した陶翁から「君は、人の国に琴の声を伝へひろむべ

き契りによりて、父母を離れて我が国に渡れり」(元)と、弁少将は唐を訪れた真意が伝えられる。これが唐后が打ち明けた「琴の声にかかづら」うことなのだが、ただここではかなり具體的に「人の国に琴の声」を伝え広める「契り」があつて渡唐したのだと明言する。弁少将は、本人の自覚しない前世からの運命として、この二つの役割が初めから任務として存在していたのである。

弁少将は八月十三日の月明りの夜、琴の音に引かれて様を訪れ、翁から不思議な予言を聞くことになる。「その名を問ひ、その声を聞かざりしときより、今宵ここにして君に会はむといへることを知れりき」と、弁少将は自らの意志により琴の音に誘われて訪れたと思つたものの、それはすでに運命の糸によって操られた行動にしかすぎなく、陶翁との出会いは不可避であり、そこで彼は日本に琴の音を伝える役割をもっているという、重大な予言が告げられたのである。老翁は「琴をたづさはれること、七十三年」とし、華陽公主は二十歳、「我に及ばぬこと六十二年」とすることばからすると、現在八十三歳、十歳の年から琴を弾くようになったことになる。しかし、弁少将は老翁を見て「年八十ばかり」と表現し、みずからも「我この世に命をうけたること八十年」とするので、年齢に矛盾がありはするが、ともかく八十年余この世に生きてき、今では年老いて様の月をながめながらすでに四年を過しているという。その老翁は、自分の琴を弁少将に譲り渡し、日本にもたらす琴の音の方

は皇帝の妹である華陽公主から相伝するように申し渡すのである。

天稚御子は阿修羅の切った木から三十の琴を作つて俊蔭に与えるが、彼は花園で七人の天人と出会い、「天の掟ありて、天の下に族を立つべき人」との予言を受け、ここから西の地に赴き、「そこに我が子七人とまりき。その人は、極楽浄土の樂にことをひきあはせて遊ぶ人なり。そこに渡りて、その人の手を弾きとりて、日本国へは帰りたまへ」と告げられる。俊蔭は西をめざし、険しい七つの山では仙人に助けられ、さらにたどり歩いて七つの山で天女の七人の子と会い、秘曲の伝授となるのである。その樂の音が仏の世界にまで響き、派遣された文殊に訴えたところによると、「我は昔、兜率天の内院の衆生なり。いささかなる犯しありて、忉利天の天女を母としてこの世界に生まれて、七人のとも同じ所に住まず、またあひ見ることかたし」という。これを聞いた仏は、「この山の七人、残れる業を滅ぼして、天上に帰るべし。日本衆生この因縁に、生々世々に仏にあひたてまつり、法を聞くべし。またこの山の族七人にあたる人を、三代のむまごに得べし」と、天人の罪は許されて天上世界へ帰ることを認め、七人のうちの一人は日本において俊蔭から三代目の孫として再生すること明らかにする。

陶翁が琴の伝授に関して華陽公主を紹介したのは、天女が俊蔭に子の天人を教えたのが背景にあるのであろうし、許されて天上に帰るのは、公主が琴の音を弁少将にすべて授けた後に死

ぬことに通じ、天人の一人が俊蔭の孫として日本に生を享けるというのは、やがて公主が長谷寺で再誕し、二人の間に琴を伝えていく子孫の出現する話へと展開していくはずである。すでに幾度か指摘したように、この作品の枠組みとしては『宇津保物語』の俊蔭巻が存しており、それをアレンジして用いる方法によっているのである。華陽公主と弁少将との関係については別に考察する機会を持ちたいが、彼女の死は『浜松中納言物語』における唐后が忉利天に一旦昇つて後、ふたたび吉野姫君の腹に転生するように、人間としては死という現象ではあつても、同じく忉利天に帰つたことを意味するのであろう。

公主は「いはけなくてこの山に物忌したまひける秋の月の夜、仙人くだりてこの琴を教へけるによりて、八月九月の月のさかりには、かならずかの山にこもりて、この音をならしたまふ」(三三)と、彼女は幼いころ物忌によって商山を訪れた秋の夜、天上世界から仙人が下つて琴を教えたため、その後は毎年八月九月には山を訪れて弾くことになつたという。その後も時折仙人はこの山に降りて琴を教えていたようで、「この所をしめて、このしらべをならふこと七年になりぬ」とするので、彼女は十四歳から仙人の手ほどきを受け、七年を経て今は二十歳になつてゐるのである。このあたり『夜の寝覚』の中君に天人が天下つて琵琶を教えたのに通じるが、ただ陶翁のことばによると、「女の身なれど、前の世に琴をならひて、しばしこの世にやどりたまふゆゑに」(三〇)と、すでに彼女は「前の世」において

琴を習つており、しかもこの人間世界にはしばらくとどまつているにすぎないのだという。ということとは、彼女の琴の技量は前の世から継続しており、現世においては仙人からの伝授によつてますます上達したわけで、それゆゑに陶翁も「深くこの琴の心をしれること、今の世にとりては華陽公主ときこゆる女御子には及びたてまつらず」とそのすばらしさを賞賛し、「君はこのみこの手より、琴の音をば伝ふべき人なり」と命じたのである。限られた時間だけこの世に「やどりたまふ」とは、彼女は天上世界からいわば派遣されていたといえそうで、その目的とは弁少将に琴の音を伝授することであつたはずで、この仕組みは俊蔭が教えを受けた天人と重なつてくる。

華陽公主が天人であるとする、前世で彼女が琴を習つていた事実を知つてゐる陶翁も天上世界の天人であつたはずで、それだけに「我が国おほきに乱るべきによりて、またあひ見むことかたし」(三三)と阿修羅が地上に降りて宇文会に変身している事実をつかみ、その野心を察知していたのであろう。陶翁の地上における役割は、弁少将に渡唐した運命の意味を伝え、琴の音を受ける華陽公主を紹介することであり、それが終わればふたたび天上に帰つていくことになる。それ故にこの世で「またあひ見むこと」は困難とし、「こよひの対面を契りとして、後の世に必ずふたたびあひ見ることあらむとす。またこのことを忘れたまふな」と、弁少将との天上世界での再会を表明するのである。私は、天上で公主に琴を教えたのは実は陶翁ではな

かったか、彼女は何かの罪を得てしばらく地上に生まれたため、その後見としてこの世に天下ったのではないかも考えたいのだが、問題が多岐にわたるためここの詳述は避ける。華陽公主が天人だとすると、兄の文皇帝も天人だったに違いない、だからこそ阿修羅の脅威に困惑し、しばしば天帝にその討伐を訴えていたのであり、弁少将が天上から遣わされた人物と知って「汝、必ず太子に従ひて、恐れのがる心なかれ。命あやぶみなくして、必ずもとの国に帰るべし。思ふゆゑありて、このことを洩らしつ」(三元)と、この世での果たすべき役割と運命を伝えることができたのである。このようにたどってくると、天童の弁少将、天衆の唐后、阿修羅の宇文会だけではなく、文皇帝、陶翁、華陽公主と、物語の中心となる人物はすべて天上世界から下ってきたことになる。いわば『松浦宮物語』は神々の世界を地上の人間世界に下しての物語であり、その争いと恋愛譚、それに音楽伝承譚とを結びつけた作品と私は考えている。

注

1 本文の引用は角川文庫本により、適宜吉田幸一著『松浦宮物語發見考』(一九九三年刊、古典文庫)を参照し、漢字、仮名遣いは私に改めた。なお、()内の数字は文庫本の頁数を示す。

2 「向かへる方」は、弓矢に向っての扱い方の意であろう。「弓矢のあと先」(角川文庫)とする説はとらない。

3 草津美智子「藤原定家と松浦宮物語」(『和歌文学研究』昭和五四年十一月)

4 「拾遺往生伝」の本文は、日本思想体系本による。

5 本文は前田本の『宇津保物語委弁委續』(昭和四八年三月刊、笠間書院)により、私に適宜漢字に改め、濁点を付した。

(いい・はるき)